

工学部におけるカリキュラムの見直し

工学部 丸山武男

1 基本的視点

工学部では、改組に伴う学年進行が平成9年度末に終了することから、「多様化する学生への対応」と「留年防止対策の構築」を視野に入れながら、各学科に於いてカリキュラムの見直しを行っている。

学生の多様化は、入試の多様化に伴い学生の資質と経歴が非常に幅広くなっていること、高等学校における新学生指導要領（H6年度）の実施に伴い工学を学ぶ上で必要な物理・化学を十分学んでこない学生が増加していることなどに起因している。留年生の増加は、同様な理由の他に、学生の目的意識の欠如などがその原因の一つと考えられる。

2 教養教育の位置づけ

「モノ作り」に必要な広い視野と哲学を身に付けさせるために果たす教養教育の役割は大きく重要である。教養科目の必要履修単位数が30単位に減った現在、内容の一層の充実が望まれる。現行の「履修科目の自主的選択制」は、それなりに意義のある制度ではあるが、「希望する科目が受講できない」とする学生が多く存在する現状を考えると何らかの対応が必要と思われる。また「バランスの採れた履修をしているか」も重要な問題点である。履修指導等で工夫する必要がある。

3 習熟度別教育

学生の多様化への対応の一環として、これまでの一律カリキュラムに基づく均一教育を見直し、個々の学生の学力に見合った教育を実施するという観点から、習熟度別教育の導入も検討に値する。もちろん、差別教育にならないような配慮は必要である。一部の学科では、演習科目で、習熟度別教育を実施しており、それなりの成果を上げている。

4 語学教育

平成10年度より、人文ブロック提案の「既修外国語2単位、初修外国語2単位を含む8単位制」に移行する。今後の学生の動向が注目される所である。試行後の評価・検討とそれに基づく改善が必要であろう。

また、平成9年度から基礎英語、ネイティブによる夏期集中コースが開講されておりその成果が期待される。これもいわゆる習熟度別教育であり、学生の反応などを見極める必要がある。

5 専門高校卒業生に対する配慮

英語、数学、物理、化学の補習授業を実施しており、かなりの成果を上げている。しかし、単位認定されていない現状では、一般学生に比べて、学生の負担増となるため、回を追うごとに出席率が低下するなどの問題点もある。専門高校卒業生向けの演習科目を正規に実施している学科もあり、学生の評判はよいようであるが、教員の負担増などが問題である。TAの活用などの配慮が必要である。特別科目を開講し、既習とみなせる科目の単位として認定するなどの配慮が必要との意見もある。

6 3年次編入学生に対する配慮

工業高等専門学校等からの編入生に対しては、編入学時に学科ガイダンス、個別指導などを実施している。目的意識がはっきりしているせいか、良く勉強する学生が多い。現在、教養科目は一律30単位を、専門科目は上限で46単位を単位認定しているが、認定科目の内容にミスマッチがあるとの指摘もあり、検討が必要である。

7 インターン・シップ制度の導入

職業意識、就業意識、勉学意識の向上、視野・視点の拡大には効果ありとの評価はされている。しかしながら、制度改革、企業との対応、保険・事故への対応など実施するには問題点も多い。現在実施されている「工場見学・工場（現場）実習」などの単位認定制度との兼ね合いもあり、今後の検討課題である。

8 放送大学の開講科目の活用

放送大学が実施している科目の単位認定については、大学教育の在り方も含め、その利用・活用方法の検討が必要である。

9 留年防止対策の構築

学生に「目的意識を持たせる、夢を持たせる」ことをねらいとして、平成9年度に「低学年の学生を対象に社会人による特別講義の開講」を実施した。留年防止対策には、少人数教育の実施が最も有効との意見が多い。少人数教育を実現するためには十分な講義室数の確保が最大の課題である。